求む職人!!

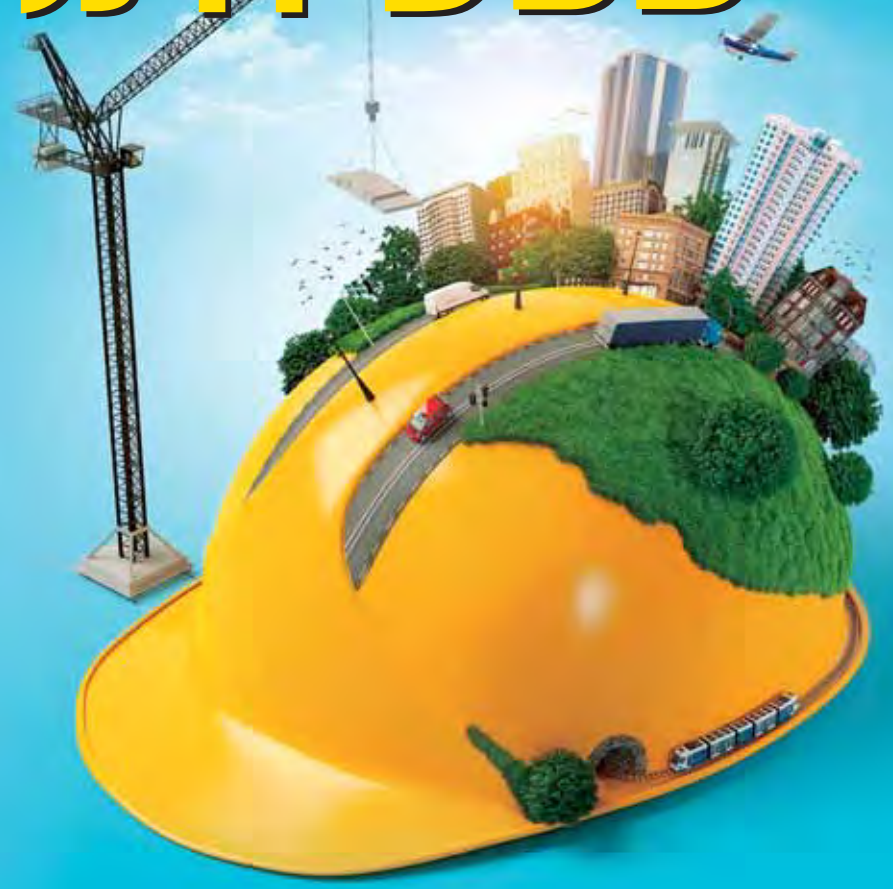
長野商工会議所
〒380-0904 長野県長野市七瀬中町276
電話：026-227-2428
FAX：026-227-2758
www.nagano-cci.or.jp

長野県地域発元気づくり支援金事業
2014.12

日本を支える重要な産業

建設業界 おしごと ガイドブック

求む職人!!



長野商工会議所

～はじめに～

この冊子を手に とってくれた君に感謝です。

君の就職の選択肢に「建設業」はありますか?

これから社会に巣立とうとしている君の「職業」の候補に、ぜひ「建設業」を入れて欲しいとの思いで、この冊子を作りました。

君の思う「建設業」は?「3K」?

「3K」なんて、誰が名付けたのでしょう。「きつい」「汚い」「危険」―。

どんな仕事でも一生懸命仕事に打ち込めば「きつい」のは当たり前です。ものを創り出すとき、仕事着が汚れるのも当たり前。高校野球の選手のユニフォームが泥まみれになっているのを「汚い」なんて言いません。それどころか「美しい」とさえ思うでしょう。「危険」は、残念ながら現場には多く潜んでいます。それが分かっているからこそ、私たちは「安全な現場」をつくる努力を続け、快適な環境づくりに邁進しているのです。

私がいる「建設業」は!

とても素晴らしい仕事です。誰もが安心して歩け、車が快適に走ることのできる道路。スカイツリー、ディズニーランド、サッカースタジアム、ショッピングビル、ホテル、市役所―。まちを見渡せば、すべてが建設業界の作品です。

まちの「景観を創り上げる」仕事なんて、素敵だと思いませんか?だから私は、40年近く携わっているこの仕事に、飽きないのかも知れません。

最後まで

読んでくださいね。現場に携わっている多くの職人さん（今は技能士と呼ぶのですが）が思いを語っています。どんな職種があるか、も書いてあります。思いのほかさまざまな職種がありますよ。そして、興味を持たれたらぜひ、私たちが開催する「職業体験」をしてください。

待っています。

災害地の復興、危険箇所の多い山間地の道路等の整備、東京オリンピックの施設作り等々、建設業界が取り組まなければならない課題は山積です。そして、それを成し遂げるには君の力が必要です。

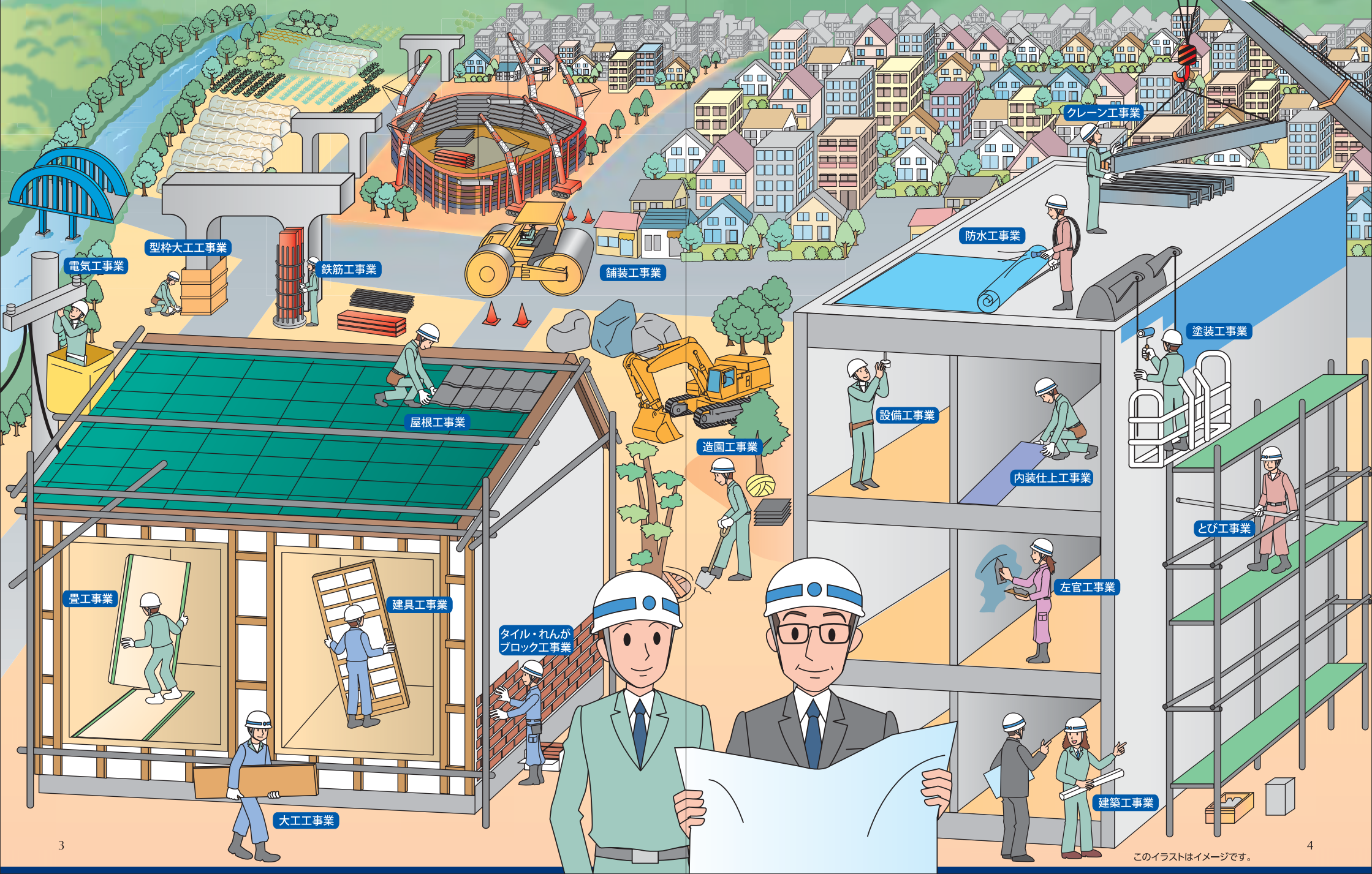
力を貸してください。

長野商工会議所 副会頭
（株式会社岩野商会 代表取締役社長）
岩野 彰

CONTENTS コンテンツ

●この冊子を手にとってくれた君に感謝です …… 1・2P
●まちのあらゆるところで職人さんは活躍しています! …… 3・4P
●建設現場はこんなところ～職人さんたちの一日～ …… 5・6P
●かがやけ! 職人 01「型枠大工」…… 7P
02「鳶（とび）」…… 8P
03「鉄筋」…… 9P
04「大工」…… 10P
05「左官」…… 11P
06「塗装」…… 12P
07「屋根」…… 13P
08「内装」…… 14P
09「建具」…… 15P
10「畳」…… 16P
11「造園」…… 17P
●おわりに …… 18P

まちのあらゆるところで職人さんは活躍しています!



このイラストはイメージです。

建設現場はこんなところ

～職人さんたちの一日～

▲8：00 入場 朝礼開始
大きな現場では10社、20社の会社から、それぞれの職人さんが集まります。

▲朝の体操
しっかり仕事をするには、何より健康が大切です。仕事の前の体操でしっかり体をほぐしてから仕事に取り掛かります。

▶打ち合わせ
朝、現場に入ると、まず職長（しょくちょう）さんに一日の段取りを確認します。職長さんは職種ごとに職人さんをまとめる仕事、職人さんたちのリーダーです。

▲職長報告
職長さんが自分たちの仕事の内容、場所、危険箇所や注意点などを報告します。自分たちだけでなく、他の職人さんたちが、どこでどんな仕事をしているのか、しっかり確かめます。

ある大きな現場の一日

- 8：00　現場入場　朝礼
- それぞれの持ち場にて作業
  - 10：00　午前の休憩
  - 12：00　昼休み
  - 13：00　職長会議
  - 15：00　午後の休憩
- 17：30　終了

▲指差し確認（朝礼終了）
職長さんの報告が終わったら、二人一組になって、ヘルメットや安全帯など、安全器具の点検を行います。

13：00 職長会議
昼休みのあとは、職長さんたちが集まって、明日の打ち合わせを行います。たくさんの職種が集まった大きな現場では、資材の搬入も順序良く行わなければなりません。

◀12：00 昼休み
昼休みには、休憩所で仮眠もとります。

▶17：00 道具の手入れ
仕事が終われば道具の手入れを行います。疲れていても、明日のためにこれだけは欠かせません。

▶10：00 休憩
良い仕事をするためには、しっかり休みを取ることも大切です。

◀17：30 帰り
今日も一日、無事に終わりました。お疲れ様でした！

▲さあ、いよいよそれぞれの持ち場で作業開始です。

工事現場はキケン？
現場には危険がひそんでいます。それだけに現場では安全が第一です。小さな危険も見逃さず、どうすれば防げるか、一人ひとりが注意を欠かしません。

仕事はきつい？
体力を使う仕事です。だから健康には特に注意します。暑い夏には水分を取り、寒い時期はしっかり着込む。休息も仕事の一部です。

きたない？
どんな仕事でも汚れは出ます。建設現場で大切なのは安全と健康。だから、整理、整頓は欠かせません。散らばった資材や道具はすぐ片づけて、汚れたらすぐに掃除。衛生管理は徹底しています。

01

かがやけ！職人

型枠大工

ワンポイント

コンクリートを流し込むための型を型枠（かたわく）といいます。鉄筋を組んだところに、180cm×90cmのパネルを並べていきます。隅は、建物の形にパネルを切ります。設計図を見て、そこから、パネルをどう並べてどんな形に切るのか、型枠独自の「加工図」を描きだして、それに合わせてパネルを作ります。

パネルを並べたら、桟やフレームで補強していきます。

同年代の仲間を見つけることが大切です

【職人インタビュー】 渡辺 栄知さん（46才）

―この仕事を始めたのは？

15歳の時です。就職先を探していて、会社を紹介されたのがきっかけです。それまで、型枠大工の仕事について何も知りませんでした。1年間は資材を運んだり、掃除をしたりの見習い期間でした。きちんと仕事をさせてもらえたのは、3年後でした。

―型枠大工はどのような仕事ですか？

コンクリートを流し込むための枠をパネルと桟で作ります。大きなものなら鉄筋コンクリートのビルや、大きな橋の橋げた、小さなものなら看板の土台の部分まで、型枠が必要です。太陽光発電のソーラーパネルも土台のコンクリートは型枠大工の仕事です。

―大変な点は？

夏の暑さはきついですね。大きな建造物も、全て型枠で囲みます。その作業中は、出入りも簡単ではありません。大きな建物では高い場所での作業も多いので、やはり怖いです。

―日々、心がけていることは？

どれだけ慣れても、危険はあります。だから怖さを忘れてはいけないんです。今日まで続けてこられたのは、大きなけがをしなかったから。仕事の手順だけでなく「怖さ」を覚えることで、危険を避けることができるのです。

―新しく入る人になにかアドバイスは？

若い人が少ないからこそ、同年代の仲間を見つけてほしい。話が合い、悩みや楽しみを分かち合える仲間がいれば、つらい時も続けていける。そして、腕が上がってくると型枠の面白さも分かってきます。

型枠でつくる建物は大きなものが多い。そして、百年先も残るものが多いです。完成した建物が自分の孫の代まで残る、次の世代に伝えていくことができる、その充実感で、それまでの苦労も忘れます。

（取材協力／株式会社ベーステック）

仕上がり

コンクリートが固まり、型枠を外すと、鏡面のようなきれいな仕上がり。特に日本の鉄筋コンクリートは高い精度と安全性を誇っています。職人さんたちの「技」が支える品質です。

02

かがやけ！職人

鳶（とび）

ワンポイント

鳶は、高い所での作業を専門とする職人さん。「足場鳶」は、建物の壁や、高所の工事のために足場を組みます。安全ロープにフックを付けると、まだ足場のない所にするすると登って素早く組み立てていきます。

この他に、鉄骨を組む「鉄骨鳶」、橋などを架ける「重量鳶」などありますが、いずれも高い所を軽やかに動き「現場の華」とも呼ばれています。

高い所の怖さを知ってはじめて「鳶」

【職人インタビュー】 酒井 雄亮さん（34才）

―この仕事を始めたのは？

18歳の時です。実は、建設業に入ったのは、重機を運転したかったからなんです。そしたら、とびの仕事に配属されて。でも、やりはじめたら面白かったので、今考えると自分に合っていたんだろうと思います。

―鳶の仕事はどんな仕事ですか？

私は、主に足場を組む『足場鳶』です。建物や高所の作業のために足場を組み、作業が終わると外します。大きな現場だと、こちらに足場を組んで、終わったところから解体、そして次の場所に組む、これを繰り返すこともあります。工事が終われば、全てかたずけてしまう、形の残らない仕事です。

―形の残らない仕事？

その点では、ちょっと寂しさも感じますね。でも形には残りませんが、どんな建物も足場があってこそ工事ができる。また、現在の建設現場では安全を第一に考えます。足場がなければ安全に作業をすることはできません。足場を組むまでは、現場の安全はまだ確保されていません。その意味で、現場の危険な場所に最初に足を踏み入れて、そこに安全を作る―、それが鳶の仕事です。

責任も重い仕事ですが、やりがいもあります。大きな建物で作業を無事に終わらせて工事が完成したときは、本当に満足感があります。

―苦労することはありますか？

足場は、必要ならどんな場所でも組まなければなりません。広い場所なら資材も機械で運べますが、狭いところは、重い資材を一つひとつ手で運ばなければなりません。機械で運んでも、組むときは手作業です。そして、鳶といったら高所作業です。マンションの高層階など高い所に足場を組むのはやはり怖いですね。

―今日まで続けてこられたのは？

私が現場を任されたのは5年目からです。何年たっても怖い。むしろ、高い所を知っているが鳶です。『高い所は平気』と言っている人ほど危ない。他人の安全を守り、自分も安全に作業する、そのためにはその『怖さ』をきちんと知らなければなりません。高い所の怖さを一番理解して、はじめて鳶職人といえるのです。

（取材協力／有限会社河東工業）

狭い場所にも

足場が必要なのは、広い場所ばかりではありません。機械の入らない裏手は、ずっと奥まで足場を運び込んで組み立てていきます。

03

かがやけ！職人

鉄筋

ワンポイント

何もない空間に、図面だけを頼りに鉄筋を張り巡らせ、建物の骨組みを作っていく仕事、それが鉄筋工です。鉄筋と鉄筋を結ぶのは、手に持っている針金。これでひとつ一つ丁寧に結んでいきます。本当に根気のいる作業です。

何より、根気とガッツが必要です

【職人インタビュー】 永井 順也さん（28才）

―この仕事を始めたのは?

18歳の時です。体を動かすのが好きだったので、外で働く仕事がしたいとこの会社に入りました。特に、鉄筋工と決めていたわけではありません。

―仕事を始めてみてどうでした?

想像していたのとはずいぶん違い、思った以上に重労働でした。それ以上に、覚えることが多かったですね。頭を使う仕事です。

―鉄筋の仕事は、どんな仕事ですか?

図面の通りに鉄筋で柱や梁の骨組みを組む仕事です。組んだ鉄筋の周りを型枠大工さんが型枠で囲んで、コンクリートを流し込むと、鉄筋コンクリートの建物になるのです。

柱なら縦方向、梁なら横方向に太い鉄筋を何本か渡し、そこにフープ筋という少し細い鉄筋を帯のように幾つも巻きます。結束線という細い針金を、ハッカーという先がカギのように曲がっている専用の道具でくるくると巻いて固定します。結束も、鉄筋と鉄筋が交差する場所を一つ一つ手作業で留めていくので、時間のかかる作業です。

―作業で気を付けていることは?

作業を言葉で説明すると、簡単に聞こえるかもしれませんが、柱の組み方、鉄筋の間隔など手順を間違えるわけにはいきません。長い梁などは、途中で熔接工の人が溶接するので、長すぎたり短すぎたらやり直しです。

また、周りを囲う型枠との隙間の幅がそのままコンクリートの厚さになるので、長くたわむ鉄筋を正確に固定しなければなりません。手順を間違えたら柱一つ分、梁一つ分やり直しです。

―仕事を続けていく中での秘訣は?

図面を見て、それを正確に形にする技能が必要となります。自分の作業を相手に伝え、相手と息を合わせるためのコミュニケーション能力も必要です。そして、何より根気とガッツがなければ続かない仕事です。

鉄筋コンクリートの建物は大規模なものが多いので、遠くからでもよく見えます。完成した建物を眺めた時、あの骨組みは自分たちが組んだんだと思うと、何とも言えない達成感があります。

（取材協力／トライアンテクノメタル株式会社）

鉄印

足場につけられたピンク色の小さな印。鉄筋からこの印までがこれから流し込むコンクリートの幅になります。離れすぎても近すぎてもいけません。熟練した腕で正確に組むことで、丈夫な建物になるのです。

04

かがやけ！職人

大工

ワンポイント

家を建てる仕事といったら最初にイメージするのが大工です。基礎工事が終わったあと、土台の上に柱を立て、桁（けた）とよばれる横木を組み、屋根の母屋や垂木、野地（のじ）板を敷きます。そこからは屋根職人の仕事になります。床板、天井、壁などを張り、そのまま仕上げまで行う場合もあります。

全体をイメージできなければ家は建てられない

【職人インタビュー】 山田 浩一さん（51才）

―この仕事を始めたきっかけは?

15歳の時です。長野工業高校の定時制に通いながら、働いていました。ちょうど中学生の時、大工だった父が自宅を作ったのです。そのときはじめて大工の仕事を見て、やってみたいと思ったのです。学校も仕事のために選びました。

―どこに魅力を感じたのですか?

家をつくっているとき、柱と柱の間に組み込む「鴨居（かもい）」が、ぴったりとはまったのを見て、すごいというか不思議でした。自分もこんな風になりたいと思いましたね。

―大工の仕事はどんな仕事ですか?

皆さんが漠然と思っている、家を建てるというイメージで大体あっています。土台から柱、桁、屋根などを組んでいきます。家の種類によって、仕上げを左官や内装、屋根などをそれぞれの職人さんにお願いします。和室なら建具屋さんや畳屋さんにもお願いします。

―一番、技術が必要となるのは?

和室ですね。きっかけになった鴨居もそうですが、伝統的な工法で作る和室は、大工の技術が発揮されるところです。

まず使う材木から選びます。柱の表面がそのまま仕上がりになりますから、色や模様なども部屋ごとに選びます。既製品ではないので、材木一つひとつ墨出しを行い、組めるようにでっぱりや穴を付けるなど「きざみ」を行います。それを組むのですが、設計図があっても、家全体を頭の中で立体としてイメージできなければ、組むことはできません。

―和室を作れるようになるには?

最低でも5年はかかります。最近は和室も減っているので、経験を積むためにはもう少し時間がかかるかもしれません。しかし、それだけに、今後、知識と経験を持った大工は貴重な存在になるでしょう。大変な仕事ですが、家が出来上がり、施主さんから感謝されるとそれまでの苦労も吹き飛びますよ。

（取材協力／有限会社嘉匠田仲建築）

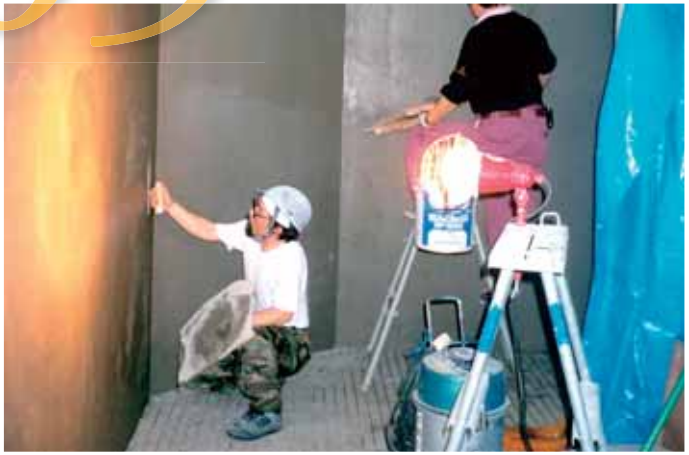
和室

大工の技が最も発揮される和室。釘を使わず、柱や桁を組んでいく「仕口（しぐち）」のためには、印をつける墨出し、材木を組むために、材木に切り込みや穴を開ける「きざみ」を行います。木の性質、微妙な調整、全体のイメージ、経験を重ねた技術がなければきれいに仕上がりません。

05

かがやけ！ 職人

左官



ワンポイント

下地に横板を打ち、モルタルが垂れないように網をはってから、壁を塗っていきます。

最後に表面を平らに仕上げます。鏡のような美しい壁に仕上がるかどうかは、コテを手にした左官職人の腕にかかっています。

社長や先輩がいたから、今日まで続けられた

【職人インタビュー】 宮崎 弘次郎さん（32才）

―この仕事を始めたのは?

16歳の時です。知人からこの会社を紹介されてこの世界に入りました。

―左官の仕事についての事前知識は?

全然ありませんでした。ものを作るのが好きだったので、建設関連の仕事で働けるところを探していて。そこで出会ったのが左官でした。

―仕事を始めてみてどうでした?

ハードでした。でも、面白そうだな、と。

作業自体は、何も知らないので、最初は資材運びからです。先輩たちが壁をすいすいと塗っているのを見て、あんな風になりたいと思いました。実は一番初め、現場にいきなり「働きたい」と押しかけていったのです（笑）。でも、社長や先輩たちはあたたかく受け入れてくれて、現場の雰囲気もすぐ馴染めました。

―左官とは、どのような仕事ですか?

壁や床をモルタルや漆喰（しっくい）で仕上げる仕事です。モルタルで下地を塗り、表面を平らに仕上げます。漆喰の場合は、モルタルの上からさらに塗っていきます。平らな壁だけでなく、曲面に仕上げることもあります。

特に階段は大変です。階段が仕上げられて初めて「一人前」。それまでの4年間は修業期間です。実際に現場を任されたのは入って7年目。素材や場所、工法など多くの種類があり、体力的にも大変な仕事です。

―今日まで続けてこられたのは?

下地でも仕上げでも、自分の手で壁を仕上げるのは楽しい。何カ月もかかった現場が完成した時の達成感も大きいです。でも、それ以上に、きれいに壁を仕上げていく先輩たちの姿を見て、いつか自分もそうなりたいと思いました。

入ったばかりの頃はモルタルを練ったり、運んだりの単調な仕事です。仕事を教え、励まし、ときには怒り、うまくいけばほめてくれる、そんな社長や先輩たちがいたから、今日までこれたのだと思います。

（取材協力／有限会社安部商会）

モルタル仕上げ

コンクリートの建物も、表面は左官屋さんが仕上げます。ビルの屋上も隅まで丁寧に仕上げていきます。

階段も、下地の粗い作りの上に、仕上げのモルタルを塗っていくことで、私たちが使う登りやすい整った階段になります。

06

かがやけ！ 職人

塗装

ワンポイント

塗装は、その建物に合わせ、お客さんの要望に応じて、色や形を整えます。決まった型や自動の機械はありません。色も何色か混ぜて作ります。

ビルでよく見かける凹凸のある壁は「吹き付け」で仕上げていきます。この作業も見本を参考に、フリーハンドで行ないます。

吹き付けの形や、壁の色、仕上がりは全て「職人さんの腕」で決まるのです。

「楽しい」、それが続ける秘訣

【職人インタビュー】 磯野 竜二さんさん（31才）

―この仕事を始めたのは?

18歳の時です。入った時は塗装の仕事について、ほとんど何も知らない状態でした。

―仕事を始めてみたら、どうでしたか?

楽しかったですね。毎回、いろいろな現場に行けるし、仕事もさまざまで、何もかも新鮮でした。

―どのような仕事ですか?

建物の内側や外側を塗装して「仕上げる」仕事です。壁の状態や下地、仕上げの方法などによって多くの作業があって、一口では言えません。塗料を塗るだけでなく、木の部分のニスを塗ったり、吹き付けなどもします。

自分が任された建物がいつまでもきれいでいるのを見ると、何とも言えない満足感がありますね。

―現場を任されるようになったのは?

入って5年目です。現場の職人さんへの指示や安全確認のほか、他の会社の人たちとの連絡も必要になります。責任も増しますが、その分、やりがいもあります。

―この仕事で大変なことは?

覚えることがたくさんあります。また、時間に追われることもあります。高い場所での作業では、安全ベルトをしっかり付けていても、やはり怖さを感じます。途中でやめてしまう人も大勢います。

―そのなかで、今日まで続けてきたのは?

高い現場に初めて登ると、見たことのない風景が広がります。それは、怖さ以上に新鮮です。ビルに限らず、新しく向かう現場は知らない場所です。そして「塗装」の仕事は、その場所に、自分の手で新しい風景を創ることです。それが楽しかった。塗装工を目指す人には、その「楽しさ」を知ってほしい。そして、それが塗装の続けていく秘訣だと思います。

（取材協力／桜井塗装工業株式会社）

塗装屋根

屋根の塗装では、サビを取り、下塗りを行い、上塗りは2回行います。この屋根では、1回目の上塗りを行っています。ここまでで2人で4日、仕上がるまでにおよそ1週間かかります。

07

かがやけ！職人

屋根

ワンポイント

左の写真は、屋根の一番上、「大棟」を積む作業。

瓦屋根は、屋根に並べて張られた「野地板（のじいた）」の上に防水シートを敷くことから始めます。この上に、瓦を留める桟（さん）を横に並べます。

屋根の大きさに合わせて、大きさの違う瓦を「割り付け」ます。瓦を屋根に持ち上げ、屋根の一番下、軒先から順番に並べ桟に釘で固定します。雨や雪が降った時、水をどう流すかなども考えながら葺いていきます。

最後の大棟がきれいに積み上がり、四方がきちんと揃うと、美しい瓦屋根の完成です。

初めて屋根から見る風景は新鮮でした

【職人インタビュー】 清水 孝一さん（31才）

―この仕事を始めたのは?

20歳の時です。小さなころからものを造ることが好きで、この仕事を選びました。主に瓦の屋根を葺(ふ)いています。

―初めて現場に出た時はどうでしたか?

怖かったですね。ハシゴを登るじゃないですか。下から見ているのと全然違うんですよ。でも、そこから見える眺めは爽快でした。

―瓦葺きはどんな手順で行うのですか?

屋根に防水シートを張り、軒先から上に重ねて瓦を並べていきます。昔は土で瓦を留めていましたが、最近は、耐震や対風のために釘で固定します。最後に一番上の大棟（おおむね）を積んで仕上がりです。きれいに仕上げるのが難しい。

―きれいな屋根、とは?

軒先や、左右の「けらば」、それに大棟がきちんと並んだ瓦屋根ですね。そのためには「割り付け」が重要です。屋根の幅はそれぞれです。現場で瓦の大きさは変えられませんから、少し広いものや狭いものを用意して、きちんと収まるようにします。また、一枚一枚、微妙な歪みもあります。隙間なく並べるために瓦を削る必要もあります。

―一人前になるにはどのくらいかかりますか?

私の場合、かわらぶき技能士2級に5年、1級が8年かかりました。屋根は家を雨風から守る大切なものです。現場で覚えるだけでなく、割り付けや瓦の性質、防水など多くの事を知らないといけません。

技能士の資格を取るために学んだことは、そのまま現場で必要な知識となります。でも、まだ学ぶことは沢山あります。

―これから屋根職人を目指す人にひとこと。

時代とともに瓦や屋根の種類も変わるので、学ぶことも多く、体力のいる仕事です。でも、きれいに仕上げた屋根を見るのは楽しいものです。

屋根は、明るい空の下で葺きます。だから、太陽の下で体を動かすのが好き、そんな人に合った仕事です。自分が葺いた屋根が並ぶ新しい街並みを作りたいという人に来て欲しいですね。

（取材協力／アサヒルーフ株式会社）

屋根にもいろいろ

屋根には日本古来の本瓦だけでなく、モルタルや金属の瓦もあります。瓦以外にも、スレート、トタンなど多くの種類があります。また、雪の降る地方では、雪を落とすために急傾斜にするか、雪止めを付けるか、それぞれ違います。「その家に合った屋根を作るのが屋根職人」。だから、時代に合わせて新しい事も学ばなければいけません。写真は、太陽光発電のパネルを設置する清水さん。

08

かがやけ！職人

内装

ワンポイント

パテで平らにした壁に、クロスを上から張っていく。横から見ていると軽々と張っていますが、これだけ長い一枚のクロスを張るのはとても難しい作業です。この部屋だと、一人で2日で仕上げるとのこと。

仕上げた時の充実を感じてほしい

【職人インタビュー】 寺尾 佳晃さん（38才）

―この仕事を始めたのは?

18歳の時です。父が内装工だったので、私もやってみたいと思って。でも現場のことは全然知りませんでした。

―実際に現場に出たときの感想は?

思ったのと全然違いました。内装を仕上げた綺麗な部屋を見て、現場もそのイメージでした。でも実際には、ほこりまみれになる作業で、イメージとのギャップに驚きました。

―内装の仕事はどんな仕事ですか?

板やボードが貼られた状態の壁の継ぎ目やへこみを、パテで平らにします。壁が平らでないと、クロスを上手く貼れません。全面が平らになったところで、ノリの付いたクロスを貼っていきます。この現場ではクロスの上から塗装をするため塗装工にバトンタッチしますがほとんどの現場では、クロスを張って仕上がりになります。

―仕事は大変ですか?

最初は難しいですよ。ほかの職人さんでもそうだと思いますが、入ったばかりの頃は、まず資材運びからやらされます。次がパテ塗り。パテベラで平らにして、サンドペーパーを掛けます。削ったほこりはかぶるし、地味で単調な作業に飽きてくることもあります。

しばらくして、クロスを貼らせてもらえるようになると、これがなかなか真っ直ぐに貼れない。シワも寄ってしまう。それが上手く貼れるようになると、次のステップに移れたことが嬉しくなりました。

職長として現場を任されたのは4年目です。この頃になると、仕上がりにも満足ができるようになりました。でも残念ながら、そこまで行く前に辞めてしまう人が多いですね。

―続けるのに必要なことは?

根気ですね。パテを塗るのは単調な仕事ですが、実際にクロスを貼るようになると、下地処理の大切さが分かります。だから、クロスが貼れるようになるまでは頑張ってほしい。

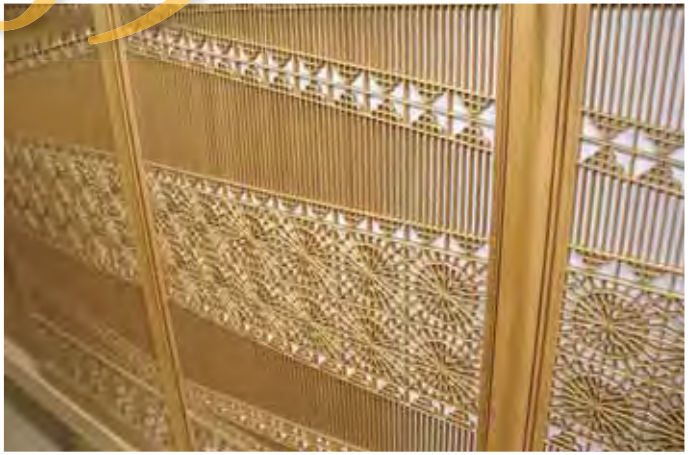
そして、『やった』という仕上げた時の充実感を感じることができれば、また続けていくことができます。そこまでの根気、それが大切だと思います。

（取材協力／株式会社岩野商会）

下地処理

「ほこりまみれになって大変」という下地処理。これが上手くいかなければ、綺麗な仕上がりになりません。複数で行うこともありますが、この現場は寺尾さん一人に任されています。一人だと、資材運びから段取りまで、全て自分でやらなければなりませんが「その分充実感はある」といいます。

建具



ワンポイント

身近な障子の格子から、らんまなどの細かな組子まで、建具は職人さんの技が生きる仕事です。基本は互いの木材を削って組み合わせるのですが、曲がらない木を数ミリ残して切って折り曲げ、厚みを考慮して角度も調整します。刃物の研ぎ方まで、高い技術が要求されます。

良い仕上がりの建具は、長く大切に使ってもらえます

【職人インタビュー】 横田　徹さん（39才）

―建具の仕事を始めたのは

18歳の時です。家が建具屋で、小さな頃から掃除や手伝いはしていました。最初の5年間は別の建具屋に勤めて、広く技術を学びました。

―建具の仕事はどんな仕事ですか?

大工が家の柱や梁といった「動かない部分」を作るとしたら、建具は、障子や引戸、ふすまなど、動く部分、開口部を作る仕事です。広い意味では、サッシなども含まれます。私はその中で木製建具を作っています。縦の「かまち」、横の「桟（さん）」を組んで、戸や障子などを作るのです。

―一人で作れるようになるのに、どの位かかりますか?

規格品に近い合板を使ったフラッシュ建具だと比較的短時間で作れるようになります。しかし、全てを材木で作るムク建具は、注文から完成まで一人でできるようになるのに5年はかかりますね。

―一番難しいところは?

障子やらんまなどに使われる「組子」は、高い技術が求められます。きっちり寸法通り切っても、組んだ時には歪みが出てしまいます。たわみやゆがみを考慮して削り、組んではじめて図面通りとなるように調整します、設計図に合わせて作っても、設計図通りには仕上がらない。そこに職人の技術が必要になるのです。最初に覚える刃物の研ぎも、細かな組子になると、よく切れるだけではいけません。角度や形を同じにしないと、仕上がりはまちまちになってしまいます。

―仕事のやりがいは?

お客さんはいい仕事を求めます。しかし、費用や時間は限られています。その中で、どれだけお客さんに喜んでもらえるか、という点ですね。建具は日常で使うものです。良い仕上がりのものは大事に使ってもらえます。

ものを作る仕事というのは、作った以上の対価はもらえません。それでも、お客さんが気に入って、長く大切に使ってもらったら、こんな嬉しいことはありません。私自身も、何代にも渡って使ってもらえるような建具づくりを目指しています。

（取材協力／栄建具工芸）

一本一本丁寧に削ります。

寸法を測り、丸太や、平割りという板から材木を削り縦の「かまち」、横の「桟（さん）」を作ります。横桟の先に「ほぞ」をつくり、かまちに穴を開けて組み立てます。

素材や組み方に合わせて調整するのは、職人さんの腕です。こうした細やかな技術は先人から受け継がれるもの。しかし、単に聞いて学ぶだけでなく自分で経験しなければ身につかないものです。

畳

ワンポイント

材料である「イグサ」の香りがもたらすリラックス効果や、住スペース活用の有効性など、その効用が見直されている「畳」。現在では、芯づくりから仕上げまで、さまざまな工程を機械で加工します。

このラインでは、多い時には6人で一日150枚の畳を作ります。すべて違う大きさなので「自分で畳を作れるようになってはじめて機械の使い方が分かる」のだといいます。使うのはラインの機械ですが、畳を作るのは職人さんの経験と技術です。

畳って、同じ形のものは一つもないんです

【職人インタビュー】 左右田 拓さん（40才）

―この仕事を始めたのは?

26歳の時です。家業が畳職人だったのですが、初めは宮大工なども行う建設業に就いていました。

小さなころから仕事を見ていたので、木造建築の現場などでは重宝されましたね。

―その後、畳職人となってからは?

実際働いてみると、実は何も知らなかったことが分かりました。面白くなってきたのは3年目くらいからですね。畳は奥が深い、そう思いました。

そもそも、家の「角」って直角じゃないんですよね。特に、木造の家では材木や敷地の関係で、正確に長方形の家はほとんどないんです。

―では、それに合わせる畳は?

大きさや形は全て違います。部屋の形やゆがみを測り、それに合わせて畳を作るのが畳職人の仕事です。もちろん、仕上がった時には、例えば、六畳間なら大きさも形もきれいに六畳並べているように見えなければなりません。

―すべて一から作るのですか?

部屋に敷き込む畳はそうです。はじめに芯となる素材を選び、その上にさまざまな素材をおよそ「7重」に重ねます。

用途に応じて素材を変えるので、普通の家で畳の種類は5種類くらい、実際には無数にあります。大きさ、形、素材、全て同じ畳は一つとしてないんです。

―繊細な日本人の文化、伝統ですね。

敷畳（しきたたみ）は江戸時代から始まりました。六畳、四畳半など、畳に合わせて木造建築の間取りも決まり、逆に、建物に合うように一畳の大きさも定まってきました。畳に合わせて家を建て、家に合った畳を作る、その流れは今も続いています。

―これから畳職人を目指す人にひとこと。

家の間取りや造りは、時代で変わります。それに合わせて畳も進化を続けます。畳職人を志す人には、「畳という文化」を愛し、自分から学び、その奥の深さを感じてほしい。そして、次の時代の新しい畳を創ってほしいと思います。

（取材協力／株式会社インテック左右田）

畳「並べ方」

直角を計り、部屋のゆがみを捉え、それをどうやって自然な並びに見せるか。そのイメージが実際の形となったとき「はじめて畳を作った」と言える、そう左右田さんは語ります。

造園

ワンポイント

今の世の中、お客さんの持っている情報は多い。見たこともないような木を植えてほしい、という依頼もあります。ただ、高原で美しい白樺も、平地の庭に植えても白くなりません。冬に枯れてしまう木もあります。成長が早く、手入れが追い付かない木もあります。そんなアドバイスを行いながら、それでも「お客さんの要望を叶える」—それが植木職人さんです。

新人でも現場に出ればプロの職人

【職人インタビュー】 宮入 友幸さん（42才）

—この仕事を始めたのは？

20歳の時です。家が園芸の仕事をしていたので多少は知っていましたが、実際に現場に出てみると、右も左もわからない状態でした。

—造園の仕事は、どのような仕事ですか？

そうですねえ、基本的には木や石の配置を決めて、ハサミで木を剪定して……そう、庭を造ることです。

—初めて現場に出た時は、どうでしたか？

毎年手入れを行っているお宅に、先輩たちと一緒に行くんです。私にとって初めてでも、お客さんから見たら私たちは「プロ」。5人で行ったら5人のプロの植木職人として見られる。そんな場所でいちいち先輩に「これはどうするんですか」と聞いてはいられません。

それこそ、最初は落とした枝の掃除をしながら、先輩たちの作業を見ながら覚えていきました。

—自分で学ぶんですか？

教科書があるわけじゃない。現場はそれぞれ違います。その中で、自分で学んでいかないといけないんです。新人だろうが、お客さんから見たらプロの職人さんに違いない。「分かりません、できません」は通用しません。

—プロとして心がけていることは？

お客さんに満足してもらうことですね。どんな木を使うか、どの方向で植えるか、どうしたら見栄えが良くなるか、もちろん専門家としてアドバイスはします。でも、最後はお客さんが求める庭にすることです。

—難しい注文もありますか？

あります。最近では、インターネットなどの普及でお客さんの知識も増えている。でも、例えば、暖かい場所で育つ木は、雪の降る所には植えられません。それでも、できるだけお客さんの要望に沿える形に仕上げる。そうして難しい仕事をやり遂げたときほど達成感があります。

—この仕事を目指す人にアドバイスを。

大切なのは続けることですね。どんな仕事でも、投げ出さず続けることしかありません。

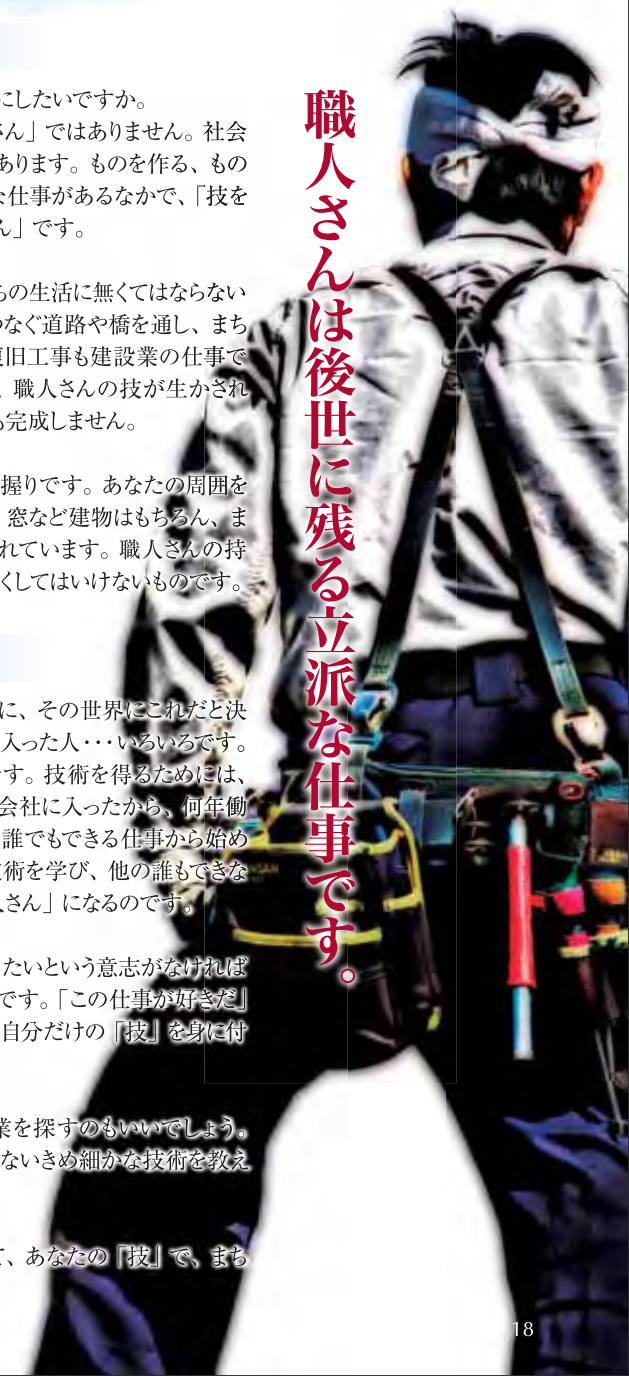
（取材協力／松代園芸有限会社）

街路樹

広い道路を彩る並木。こうした街路樹を整備するのも植木職さんの仕事です。高所作業車に乗り、一日に20本近く剪定を行います。5年、10年経ち、木が太くなると、それだけ作業も増えていきます。

～おわりに～

ここまで読んでくれた皆さんへ



職人さんは後世に残る立派な仕事です。

職人さんってなんだろう？

これから社会に出る皆さんは、何を仕事にしたいですか。

世の中で働いている全ての人が「職人さん」ではありません。社会は多くの業種から成り立ち、無数の仕事があります。ものを作る、ものを売る、サービスを売る—など、さまざまな仕事があるなかで、「技を身につけ、技を売る」—。それが「職人さん」です。

まちをつくる仕事である建設業は、私たちの生活に無くてはならない仕事です。家やビルを建て、まちとまちをつなぐ道路や橋を通し、まちをつくる。家や人を守る災害対策工事や復旧工事も建設業の仕事です。そのあらゆる場所、さまざまな場面に、職人さんの技が生かされています。そして、それなくしては家もまちも完成しません。

ここに載っている職人さんは、ほんの一握りです。あなたの周囲を見渡してください。床や壁、天井、柱、扉、窓など建物はもちろん、まちのあらゆるものは職人さんの技術で作られています。職人さんの持つ技術は無くてはならないもの、そして、失くしてはいけないものです。

職人さんになるには？

職人さんたちのインタビューにあったように、その世界にこれだと決めて入った人、家業を継いだ人、なんとなく入った人・・・いろいろです。

誰でもはじめは何も知らない「素人」です。技術を得るためには、自分から求めていかなければなりません。会社に入ったから、何年働いたからなれるというものではありません。誰でもできる仕事から始めて、少しずつ仕事を覚え、時間をかけて技術を学び、他の誰もできない自分だけの「技」を身に付けた時、「職人さん」になるのです。

誰でも職人さんを目指せます。でも、なりたいという意志がなければなれません。技術を磨くための努力も必要です。「この仕事が好きだ」という気持ちを持ち続け、誰にもできない、自分だけの「技」を身に付けてください。

自分の技を磨くなら、地元、長野の企業を探すのもいいでしょう。身近な小さな会社の方が、他では覚えられないきめ細かな技術を教えてもらえるかも知れません。

あなたも職人さんになりませんか。そして、あなたの「技」で、まちに新しい風景を刻んでみませんか。